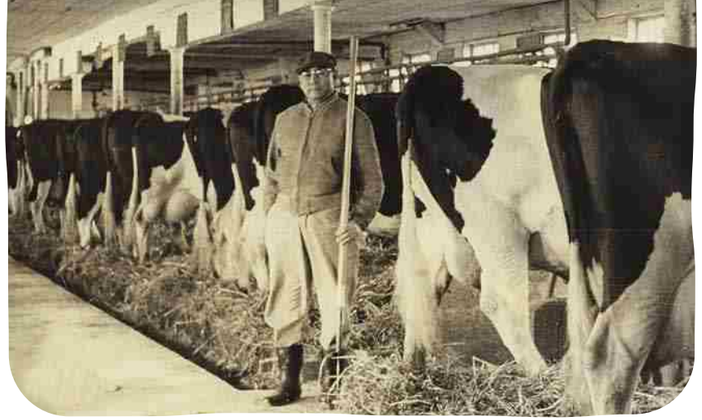
創業から変わらない。土づくり、草づくり、牛づくり。

牛づくりの神様、町村敬貴。

町村農場の創業者、町村敬貴が生まれた明治15年は北海道農業の転換期。北国にふさわしい、牛と作物を組み合わせた新しい農業が胎動を始めた年でした。

家畜の飼い方について、当時まだ十分なノウハウもなかった日本。敬貴は、独力で牛の喜ぶ環境づくりを習得しなければならず、札幌農学校への進学後、酪農先進国であったアメリカの小さな農場で10年働きました。そして、帰国してすぐ大正6年石狩市樽川の地に、現在100年以上の歴史を誇る「町村農場」を拓いたのです。



良い牛をつくるには良い草、良い土から。

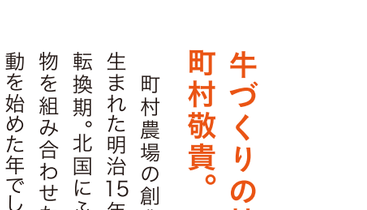
最初に牧場を作った石狩市樽川も、その後移設した江別も元々は栄養分の少ない痩せた土地でした。しかし、強い信念のもとに独自の手法で土づくりに励み、数年後には青々とした牧草が生え、健康な牛が育つようになったのです。

「土づくり、草づくりは、現在の町村農場にとっても最も大切にしていることの一つ。土の栄養分が偏ることのないように、メンテナンスを欠かすことはありません。100年後も豊饒な大地と栄養たっぷりの牧草がこの地に育つように、そして健康な牛が元気に育つように、今日も試行錯誤は続いています」。

乳牛販売から、商品開発へ。

昭和41年、「市乳部」が開設。酪農家が増え産業としての酪農業が発展する中、それまでの乳牛の個体販売を柱とする経営から、創業の翌年(大正7年)から製造を手掛けていたバターに加え、瓶入り牛乳の製造と販売も開始しました。以来、町村農場は多くの人から愛される乳製品を生み続けています。

「現在、『町村』のブランドを冠するアイテム数は30種類を超えています。伝統ある新鮮純良バターや特選牛乳はもちろん、飲むヨーグルト、チーズ、アイスクリームなど。一つひとつ徹底的に考え抜いた自信作ばかりです」。



店舗でのこれから

町村農場は道内外に7カ所の店舗を設けています。「農場の牛乳をいろいろなカタチで表現し、その美味しさを多くの人に伝えたい、町村農場を知っていただきたい、そう考えているときに丁度、地元のスーパーから出店の依頼が入ってきたのです」。今までの農場の取り組みを街の人に知ってもらう良い機会だと考え、出店を決断したそうです。

「オープン後は、昼間農場で働き、夕方には販売業務をしていました。実際に店頭に立って、これからの運営の仕方や商品について考えを巡らせていきました」。

お店に並ぶメニューは、生乳から作られるバラエティ豊かな乳製品たち。そんな商品を求め、毎日来店するお客さまもたくさんいます。

「牛飼い、乳製品製造、そして販売。高品質の生乳を作りだすところから、その生乳が数々の美味しい乳製品となってお客さまの口に入る最後までを見届けます。創業者である敬貴の『どんなところでも学ぶ機会にする』という言葉を胸に、これからも製造の現場と販売の現場を横断しながら、北海道一の農場を目指していきます」。

町村農場
江別市篠津183
TEL：011-382-2155(代表)

Agriculture Now

広がる6次産業化!

6次産業化とは農林漁業者が生産(1次産業)だけでなく、加工(2次産業)、販売(3次産業)も行うことで、経営の多角化を図り新しい産業を形成しようとする取り組みのこと。

生産者ならではの視点とこだわりで作られた商品は、品質の高さだけでなく、顔の見える安心感も。健康志向の高まりとともに、食の安全を求める消費者を中心に人気が広がっています。

北海道でも広がる6次産業化の動きに対し、道では相談窓口として「北海道6次産業化サポートセンター」を設置しています。
公益財団法人北海道中小企業総合支援センター内　TEL 011-200-0013

なぜ6なの?

生産 1次 × 加工 2次 × 販売 3次 ＝ 1・2・3を掛けて 6次産業

生産物の付加価値の向上と雇用の創出

confamail

編集者から 農業・農村の魅力や大切さ、また、将来の職業として「農業」を選択する方が一人でも増えるよう、魅力ある農業者や農業を支える方々の活躍を発信してまいります。

読者から 2018年春号へのお便り
ちょっとした夢からでも始められる農業もあるのだと感じました。私は農家の嫁で、手本にはならなくても応援はできます。この冊子をもっと若い人達にも読んで欲しいと思いました。(名寄市50代女性)